

【資 料】

連載：「高木兼寛と森田正馬」その2

イギリス医学の源流を、東京慈恵会成立過程から探る

—不治の病「脚気」が導き出した不安の時代—

中 山 和 彦

東京慈恵会医科大学精神医学講座

(受付 平成 21 年 5 月 11 日)

I. 脚気が 開国を加速させ、明治維新を引き寄せた

1. 脚気による徳川幕府の終焉

文久2年（1862）6月、ウィリアム・ウィリスが横浜の土を踏んだとき、日本の衛生状態の悪さに驚愕したという。その頃の日本人の平均寿命は30歳代だった。その死因のなかに当時感染症と思われる不治の病、脚気があった。

幕末である嘉永6年（1853）、篤姫は13代将軍、徳川家定のもとに興し入れした。その家定は35歳の若さにして亡くなった。死因は脚気による心不全と言われている。14代将軍として養子になった家茂も、27歳の若さでやはり脚気で亡くなった。家茂の妻は、孝明天皇の妹の和宮である。和宮はもともと有栖川宮熾仁（たるひと）親王の許婚であった。公武合体のため降嫁したのである。和宮もまた脚気によって32歳で亡くなっている。（有栖川宮熾仁親王は、東京慈恵医院の誕生と大きなかわりがある。後述。）その後、徳川家は15代将軍として慶喜が継いだ。そして慶喜の引退後、家達（いえさと）が6歳で徳川宗家を継いだ。篤姫（天璋院）は、徳川家の最後の仕事として家達を養育した。家達は後の明治40年（1907）7月19日、社団法人・東京慈恵会の初代会長になった人物である。

このように、脚気のため、徳川家は相次いで若くして当主を失い、次々と当主を変えざるを得なかった。その事は徳川幕府の勢力を大いに衰えさせたであろう。激変する時代の波に対処しきれず、

不治の病であった脚気がそれを加速させ、慶應4年（1868）、大政奉還・王政復活・江戸開城を経て、足早に明治維新を迎えることになったともいえる。

明治になって帝国日本の形態は整いつつあった。しかし国力の源である多くの軍人達が相変わらず脚気によって病死していった。この状況は、国際的にも独立した帝国日本を目標にしている明治政府の威信に関わる問題であった。当の明治天皇も脚気で悩んでいたという。

そんななか高木兼寛は明治17年（1884）2月3日から18年（1885）11月11日に練習艦、筑波によって脚気の栄養学説を証明し、その予防法を確立した。高木の医学は常に、実践的、実用性を基本とする、イギリス医学に立脚するものであった。この究極の臨床試験の成功は、明治政府に真の国力の増強に貢献したことになる。しかし当時は、開国、明治維新がもたらした欧化政策によって、ドイツ思考の学理学的、権威主義が支配的であった。残念ながら高木の栄養学説に基づく予防法はすぐには取り入れられなかった。明治43年（1910）鈴木梅太郎がビタミンB₁を発見しても受け入れられなかった。日本政府（陸軍）は脚気の最終的



写真1. 島國順次郎（1877-1937）

な結論を求めて、明治41年（1908）臨時脚気病調査会（初代委員長、森林太郎、青山胤通ら）を発足した。大正5年（1916）年京都帝大の島園順次郎（写真1）と、慶応大学の大森憲太が脚気の原因をビタミンB₁であることを実証した臨床試験を行い、大正8年（1919）に第16回内科学会でその事実を発表した。この研究成果は評価されたが、委員会が正式に「脚気がビタミンB₁欠乏によって起きること」を認めたのは、さらに遅れること、大正13年（1924）のことであった（16年間で29回の会議が開催された）。高木が究極の臨床試験を行ってから何と約40年間の月日を要したのである。もっと早く栄養学説を受け入れていれば、明治、大正の日本の世界における構図は大きく変わっていたかもしれない。

いずれにしても脚気という貧しさの象徴のような不治の病が、わが国を近代日本へと近づけたと考えると歴史の展開も興味深い。またこの歴史的事実の源流に、イギリス医学の精神が深く、強く流れていること、そしてわが慈恵の学祖である高木兼寛が大きく関わったこと、これは何物も換え難い我々の誇りと言えよう。

ここで補足であるが、陸軍の長きにわたる脚気感染説に終止符を打たせた島園順次郎について述べる。明治35年（1902）現在の日本精神神経学会の前身である日本神経学会が呉秀三、三浦謹之助が発起人で誕生した。この学会は精神病学者、神経病学者、心理学者の集まりであった。島園は内科医であったが、神経病学者として精神病学者とともに同じ舞台上で活躍した。神経学会では大正13年（1924）から幹事、主幹として主役であった。島園による大正8年（1919）の脚気原因の講演は当時の精神科医にとっても驚異的なものであった。というのも当時精神病院では脚気による死亡が結核について多数を占めていたからである。京都岩倉病院の土屋榮吉院長は、病院食を半搗き米にしたところ、明治42年-大正7年（1909-1918）に脚気での死亡者が79名であったが、大正8-9年（1919-20）には2名、大正10年（1921）には消滅した。高木の究極の臨床試験は島園を通して精神病院でも行われたことになる。その成果は学会誌に発表され注目された（神経誌25（8）：458-647, 1925）。

2. 不治の病「脚気」が導き出した不安の時代 —「こころの開国」

不治の病「脚気」が、近代日本へ近づけ、開国の導線になったと同時に、もうひとつの開国、それは「こころの開国」にもつながった。日本人には自分を犠牲にしても人に尽くす、さらには国に対しては死を持ってしても貢献するという、いわゆる伝統的な大和魂がある。「死」に対する考えかたに異変が起こるきっかけとなった日清戦争（明治27-28年（1894-1895））、日露戦争（明治37-38年（1904-1905））では、戦死者よりも数多くの脚気による死亡者（全軍の3%）が出た。これは無駄な死と言わざるを得ない。その一方で戦争の勝利は日本に繁栄をもたらした。結果としてそれまでの集団中心の社会生活から個人の生活が浮き彫りになってきた。明治に続く大正ロマンがそれを象徴している。それは個人としてより自分らしく生きたいという、新鮮な感情の芽生えであった。これは「こころの開国」、個人のこころのなかに起きた文明開化ともいえる。

森田正馬はそのような新しい文化の展開がみられていた明治中期に、思春期を過ごした。「不治の病」は脚気に限らず恐怖を呼び起こす。そんな自然な感情が森田の中学時代を取り巻いたのである。森田が自らの不安体験を基盤にして森田療法を完成したことはよく知られている。その実態は「脚気恐怖」と「神経衰弱」であった（写真2）。

森田は明治21年（1888）中学に入学して頭痛持ちで病弱であった。その後心臓神経症（パニック障害、心臓脚気恐怖）、神経衰弱（心気症）などで悩まされ、卒業に7年かかっている。その間



写真2. 森田正馬
(1874-1938)

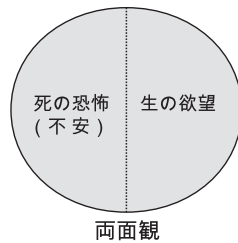


図1. 森田の人間観

の明治25年（1892）、18歳の時、友人と無断で上京し苦学していたとき、脚気になって帰郷したという。それからまた明治31年（1898）東京帝国大学に入学後も精神的に集中できず、夜間には心悸亢進発作が出現した。明治32年（1899）、東京帝大病院で「神経衰弱兼脚気」と診断されている。この神経衰弱と脚気の合併という診断が興味深い。実際脚気であったかどうかは別にして、森田の強い不安感を当時の医師が見抜いていたのである。当時文化病とされた神経衰弱と不治の病「脚気」は連動して不安を増強していたのである。

森田は当時、森林太郎とともに脚気の脚気菌による伝染病説を曲げなかった帝大内科教授の青山胤通の講義を受けていることが記録されている。後にその対極にあった高木のもとで、森田療法を編み出すことになったのは偶然とは言え、興味深い。

脚気の症状は全身倦怠感、下肢の異常感覚、浮腫、心悸亢進、胸内苦悶、突然死などが特徴であった。森田が体験した夜間の心気亢進発作（パニック発作）は、脚気の症状と非常に類似している。死を意味する脚気は、恐怖であり不安の原因として十分であった。森田の疾病恐怖、心気症、神経衰弱は十分理解できることである。しかし森田は神経衰弱から脱していく過程で、不安障害者にみられる認知のゆがみと感情特性にヒポコンドリー性基調があることを見出していくのである。

森田療法の基盤に森田が主張した人間観がある。それはひとには「死の恐怖（不安）と生の欲望」の両面性があるという理論であった（図1）。

死の病に罹患したのではと恐怖のおののくのは、より良く生きたいと願う生への欲望の現れであるとした。神経症者は心配性で小心のいわゆるヒポコンドリー性基調を持つ。それと同時に、完全主義で生への願望が強すぎる。結局、弱力と強力性に両極を有する性格であると主張した。

明治35年森田は東京帝国大学を卒業し、巢鴨病院院長兼東大精神科教授であった呉秀三のもとで精神科臨床に携わった。その後明治40年（1907）の東京慈恵会医科大学（以下、慈恵）にとって最大の改革であった東京慈恵会が発足したとき、精神医学講座の初代教授としてイギリス医学を基盤とした私立の大学に参入したのである。このことは森田療法を生み出していくための最も適した舞台と大きなエネルギーを得たことになる。森田療法は、不安の原因を積極的には追及しない、制御不能な過去の出来事や、将来に対する不安を問題にしない。重要なのは目に見える今、現実にある事実だけであるとした。森田理論の原点にあるものは、高木の目指す役に立つ実学的医学に基づくイギリス医学の神髄に共鳴した独特の精神療法であった。

3. 明治政府の欧化政策を加速させた原動力

開国後の明治新政府は、帝国日本を目指すために欧化政策の必然性があった。その躍進的な原動力となったのが、ウィリアム・ウィリスの登場であった。彼の足跡にそれを見ることができる。そのうち重要なポイントは3つである。

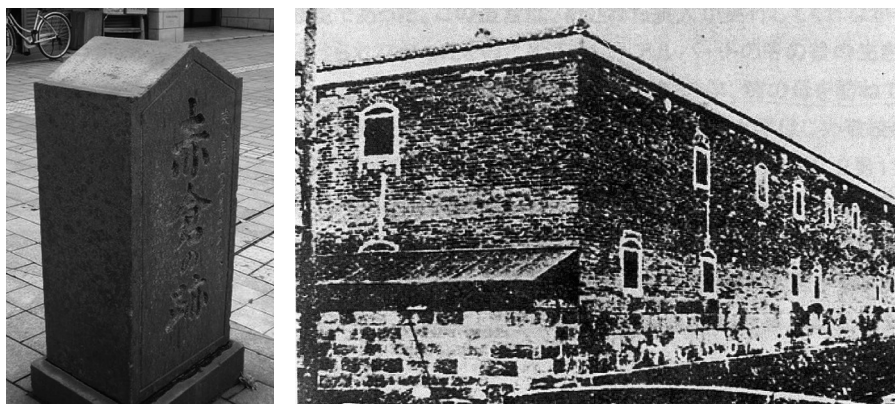


写真3. ウィリアム・ウィリスが建てた赤倉病院跡（明治2年、鹿児島）と赤倉病院
赤倉病院 尾辻義人 薩摩の医学史 鹿児島日英協会会報2005；8：14-7より転載

まず明治元年（1868）6月、京都相国寺の養源院内に設けられた薩摩藩病院での活躍である。この病院は薩摩藩の負傷者を収容する仮病院であった。その需要は高まり、より高度な医療が望まれていた。そこで、薩摩藩の西郷隆盛、大久保利通、大山巖らは英国公使パークスに依頼してウィリアム・ウィリスを派遣してもらったのである。この薩摩藩病院は戊辰戦争が東に広がっていくにつれて移動する（横浜、越後高田、柏崎、新発田、会津）移動病院であった。彼が見せたイギリス医学はそれまでの日本の医療を圧倒したことは言うまでもない。高木も戊辰戦争での高度なイギリス医学を基盤とした医学を目の当たりにして、それを学ぶ必要性を感じ取っていたのである。

2つ目は彼の功績によって、明治2年（1869）に東京医学校兼病院の院長に就任したことである。そのことによって医療面だけでなく、医学教育面での改革が日本にとって急務であることも明白になっていった。

そして3つ目は、鹿児島医学校での医学教育と赤倉病院での活躍である。これは医学校取調御用係の佐賀藩の相良知安と福井藩の岩佐純によって政府の方針が急遽ドイツ医採用に変更され、わずか9ヵ月で活動の場所を失ったためであった。この赤倉病院（写真3）は文字通りイギリス医学の象徴となる赤レンガ造りであった。高木兼寛は戊辰戦争と赤倉病院でのウィリアム・ウィリスの活躍を目のあたりにしてイギリス医学の威力を体感していたのである。

II. 鹿鳴館外交の失敗が、慈恵にとって初めての改革を導いた

1. 有志の寄付と皇族の援助の限界

明治15年（1882）8月10日、高木兼寛が創立した有志共立東京病院は、施療病院であった。総裁は有栖川宮威仁（たけひと）親王殿下であったが、経営母体はその名の通り有志による寄付が主であった。それだけではすぐに経営は困難になった。高木は英国における施療病院の運営は皇室の援助が大きかったことを知っていた。高木は以前より伊藤博文と親交があった。明治17年（1884）

5月、伊藤の進言により明治新政府の重鎮らの夫人達、伊藤（博文伯爵夫人）梅子、井上（馨伯爵夫人）武子、松方（正義伯爵夫人）満佐子、大山（巖伯爵夫人）捨松らによって、後援組織「婦人慈善会」を結成するにいたった（写真4）。時代の要請もあったが、伊藤、井上はイギリス志向の強い人物であった。高木の同病院創立趣旨がイギリス医学の実用的病院学に立脚した施療病院であったことは、彼らにとって賛同しやすかったのではないかと考えられる。

そして何よりも心強かったのは総長が有栖川宮熾仁（たるひと）親王妃薫子殿下、副総長は有栖川威仁（たけひと）親王妃慰子（やすこ）殿下と皇室の協力を戴くために最も強力な組織ができあがったことである（写真5）。有名な鹿鳴館バザーはこの後援組織によって行われた。その寄付金によって大きな資金を得たが、実際にはその効果は一時的であった。

その鹿鳴館について興味ある事実がある。幕末の文久3年（1863）5月12日から翌年の6月24日まで伊藤博文や井上馨らはイギリスに密留学している。当時、伊藤や井上は尊王と攘夷に生きていた。その意味では矛盾した行動に思える。しかし彼らは将来の独立した日本の構築にとって、やむを得ない欧化政策の必要性からの行動であった言われている。また井上馨は財政システム研究のために、明治9年（1876）から11年（1878）にかけてヨーロッパに出張した。その間の明治9年（1876）9月12日から12月24日まで、ロンドンに滞在している。ヨーロッパのなかでもイギリス志向の強かった井上は、ロンドンで建築家ジョサイア・コンドルに出会ったと言われている。明治10年（1877）1月28日、伊藤博文はジョサイア・コンドルを政府のいわゆるお雇外国人として招聘した。その最も重要な仕事は今でいう迎賓館の建築（鹿鳴館）であった。もともと明治維新による欧化政策は、医学はもとより、あらゆる分野でイギリスがお手本であった。興味深いのは、鹿鳴館と同時期（明治15年（1882）から17年（1884））に、ジョサイア・コンドルは有栖川宮邸、東京帝国大学法学部校舎も手掛けている。東京帝国大学法学部と言えば、後に登場する穂積陳重が初代教授である。



伊藤博文, 梅子夫妻



井上馨, 武子夫妻



松方正義, 満佐子夫妻



大山巖, 捨松夫妻

写真4. 婦人慈善会のメンバー

伊藤博文, 井上馨, 松方正義, 大山巖, 大山捨松

国立国会図書館 近代日本の肖像より転載 <http://www.ndl.go.jp/portrait/>[accessed 2009-10-27]

伊藤梅子, 井上武子

永原和子監修. 日本女性肖像大事典. 東京: 日本図書センター; 1995. より転載

松方満佐子

鹿児島市立美術館所蔵 <http://kagoshima.digital-museum.jp/>[accessed 2009-10-27]



明治天皇と昭憲皇太后



有栖川熾仁親王と妃薰子殿下



有栖川威仁親王と妃薰子殿下

写真5. 明治天皇と昭憲皇太后, 有栖川宮熾仁親王と有栖川宮熾仁親王妃薰子殿下,

有栖川威仁親王と有栖川威仁親王妃慰子

雄松堂書店 明治のアルバムより転載

<http://www.yushodo.co.jp/pinus/61/meijiphoto/index.html>[accessed 2009-10-27]



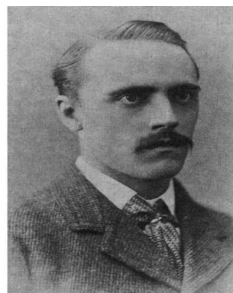
鹿鳴館



東大法学部



有栖川宮邸



ジョサイア・コンドル



エドウィン・ベルツ

写真6.

ジョサイア・コンドル

東京大学法学部

有栖川宮邸

畠山けんじ. 鹿鳴館を創った男. 東京：河出書房新社. 東京：1998より転載

エドウィン・ベルツ

奈良市 澤井康悦氏提供

鹿鳴館

横浜開港資料館所蔵

2. ジョサイア・コンドルは建築界の ウィリアム・ウィリス

明治9年（1876）6月，東京医学校内科医学教師としてドイツからエドウィン・ベルツが来日した。明治2年（1869），明治政府はイギリス医学からドイツ医学へ一転した政策をとったが，その最も重要な立役者になった人である。脚気の論争でもドイツ医学の得意とする細菌学に立脚して，高木の栄養学説に対して，真っ向から菌原因説を唱えて対抗した。3歳違いのジョサイア・コンドルとベルツは同じお雇外国人として交流があった。彼ら自国での高い評価と地位を捨て，来日した不安のなかにあった。同じ境遇にあった2人の間では，イギリスとドイツ文化の対立はなかったようである。

ウィリアム・ウィリスがそうであったように，ジョサイア・コンドルに与えられた仕事は3つあった。まず1つ目は教育であった。工部大学校（東京大学工学部）の初代教授であった。その弟子のなかに東京駅，造幣局を設計した辰野金吾がいる。東京駅がなぜレンガ造りなのか理解ができよう。2つ目は皇居新宮殿の建設であった。そして3つ目が帝都東京の建設であった。コンドルの最も得意としたのは，ヴィクトリアン・ゴシック様式にイスラム様式を取り入れたものであった。これはロマン主義，個人主義的なイギリス邸宅風が特徴であった。それは明治政府の求める権威的で，しかも華やかさがある建築とは大きく違っていた。そのなかにあって最もコンドルの代表作である鹿鳴館が明治16年（1883）11月28日に開館した（写真6）。この鹿鳴館はクラシック系のル

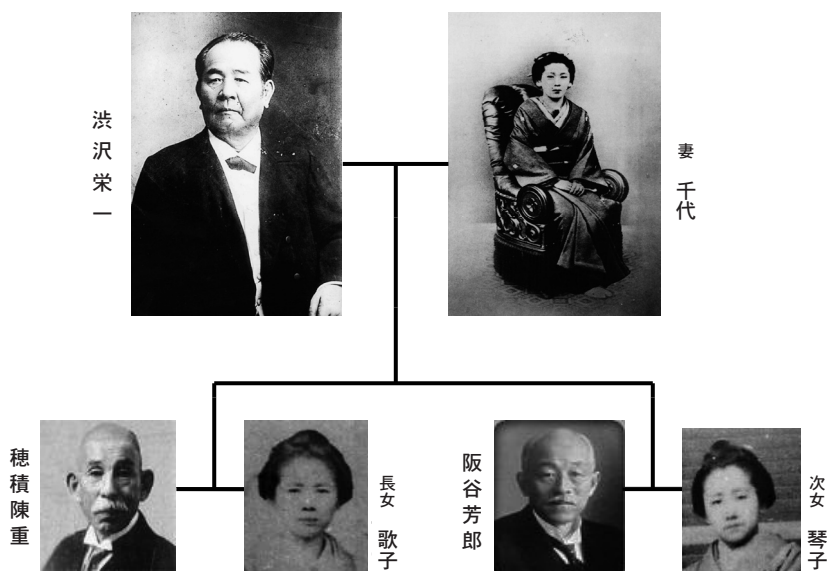


写真7. 渋沢栄一・御一家

渋沢栄一、歌子、琴子の写真
渋沢史料館所蔵

穂積陳重

日本学士院（10代学士院院長）より転載

<http://www.japan-acad.go.jp/japanese/about/successive.html>[accessed 2009-10-27]

阪谷芳郎

阪谷芳郎傳. 故阪谷子爵記念事業舎 編. 東京: 東京都千代田区日比谷公園市会館東京市政調査会; 1951. より転載

ネッサンス様式でコンドルらしい地味な邸宅風であった。

ここで例の婦人慈善会による慈善バザーが明治17年（1884）と18年（1885）に2回行われたのである。そのバザーで得られた1万5千円が有志共立東京病院に寄付された。バザーは成功でも鹿鳴館は失敗作といわれている。本格的な外国人接待所（迎賓館）としてはあまりにも地味であった。政府はジョサイア・コンドルの解雇を決めていた。すべてのプロジェクトから政府は彼を外していった。明治政府が求めたのは権威性、華麗性、威厳性、統一性などを備えたバロック風建築であり、それはドイツ建築そのものであった。イギリス人、ジョサイア・コンドルからドイツ建築界の大家、エンデとベックマンを登用することになった。

医学だけでなく、建築学においてもイギリスからドイツ様式へ政府の採用が変更になったのである。このことは、当時の欧化政策の意義を考えるのに興味深い事実である。そのなかに脚気論争があったわけであるが、明治政府のイギリス医学からドイツ医学への急激な変更も、単なる研究の志

向性の違いだけではなく、政治的事情も含まれていたのではないかと考えてくる。

鹿鳴館外交は井上馨の外務大臣辞職の明治20年（1887）9月16日に終決した。同じこの年、有志共立東京病院も大きくかわることになった。明治19年（1886）までは、有志による寄付と皇族を軸とした婦人慈善の寄付でなりたっていたが、募金活動の限界であった。

3. 真の施療病院のあり方を問われる

明治20年（1887）4月1日、有志共立東京病院は東京慈恵病院と改称した。また婦人慈善会も東京慈恵医院会と称することになった。しかし最も大きな改革は総裁を明治天皇皇后陛下（昭憲皇太后）に推戴することであった。幹事長は有栖川宮熾仁親王妃薫子殿下であった（写真5）。この改革によって皇室からの援助、民間有志からの援助は目に見えて増加した。このころより穂積歌子（渋沢栄一の長女）が婦人会の拠金者の名前に出てくるようになった。これがさらに慈恵にとって、待

ち受けている大きな改革に種火となるのである。

明治29年（1896）4月、幹事長が有栖川威仁親王妃慰子殿下に交代となった。同時に常任幹事に穂積歌子と阪谷琴子（渋沢栄一の次女）が加わった。渋沢かね子（渋沢栄一の妻）をはじめ、渋沢家の東京慈恵医院に対する援助は深まっていた（写真7）。しかしそれに反して慰子殿下が幹事長であった明治29年（1896）から39年（1906）までは収入は横ばいであった。医院経営はなんとか運営できても、活動には限界があった。その意味は皇后陛下を総裁にし、皇室が援助している施療病院としては国際的にみてもあまりにも小規模であったことである。稼働病床数は50床足らずだった。世の中に十分に寄与するためには西洋の施療病院のように規模を拡大する必要性があったのだ。そのためには大改革が必要であった。しかしこの間、大改革を担う重要な人物は揃いつつあったのである。

III. “民法の祖” 穂積陳重（のぶしげ）による 慈恵の大改革 ーそのほとんどがイギリス留学経験者ー

1. 有栖川威仁親王、穂積陳重、高木兼寛、 徳川家達と渋沢栄一

筆者の郷土、宇和島に“穂積橋”がある（写真8）。穂積陳重は、市が銅像の建立を申し出たところ「老生は銅像にて仰がるより、萬人の渡る橋になりたし」と硬く辞退したという。そのため、改築中の橋を穂積橋として受懐してもらったものである。

穂積陳重は安政2年（1855）宇和島藩士・国学者穂積重樹の次男として生まれた。長男は宇和島藩主であった伊達侯爵家の家令となった。三男は八束（やつか）も法学者で陳重とともに一時東京帝国大学教授として活躍し、特に大日本帝国憲法の解釈普及に力を注いだ人物である。

穂積陳重は明治9年（1876）から明治14年（1881）までイギリス・ドイツに留学し、法律学を学んだ。明治19年（1886）より大正1年（1912）東京帝国大学教授、日本で最初の法学博士となった。日本の民法の祖と言われた。



写真8. 穂積橋
「老生は銅像にて仰がるより、萬人の渡る橋になりたし」

高木がイギリスに留学したのが明治8年（1875）6月13日から明治13年（1880）11月5日であった。ほぼ同時期であったのは偶然である。しかしその縁は明治40年（1907）の慈恵の2回目の大改革につながっていたのである。

またこの改革の主役のひとりである徳川家達も、明治10年（1877）から明治15年（1882）10月まで徳川家達はイギリスのイートン・カレッジに留学していた。家達は明治23年（1890）から貴族院議員を務め、明治36年（1903）から昭和8年（1933）まで貴族院議長として活躍した。徳川内閣が成立に至るほどの政治手腕を発揮した人物である。有栖川威仁親王も明治13年（1880）から16年（1883）まで尉子妃殿下を残してイギリス海軍に留学している。威仁親王は大正天皇が誕生するまで皇太子の役割を果たしていた。

有栖川威仁親王、穂積、高木、徳川はイギリスというキーワードで運命的につながっていた、それをつないだのが、渋沢栄一と考えると歴史もますます面白くなる。

そのつながりをもう少し説明しよう（写真9）。明治24年（1891）5月11日来日中のロシア皇太子ニコライ2世を、津田三蔵が暗殺しようと傷害を加えた、いわゆる有名な「大津事件」が起きた。このときニコライ皇太子の接待役であったのが、有栖川威仁親王であった。明治天皇とともにその対応ぶりが評価され、ロシア側の反応は最小限にとどめることが出来たといわれている。この時、高木兼寛は43歳、海軍医総監であり、京都行きを命じられ治療に携わるべくニコライ皇太子の旅館まで随行した。結局ロシア側は日本の好意は十分承知しているとし、大事にいたらなかった。高

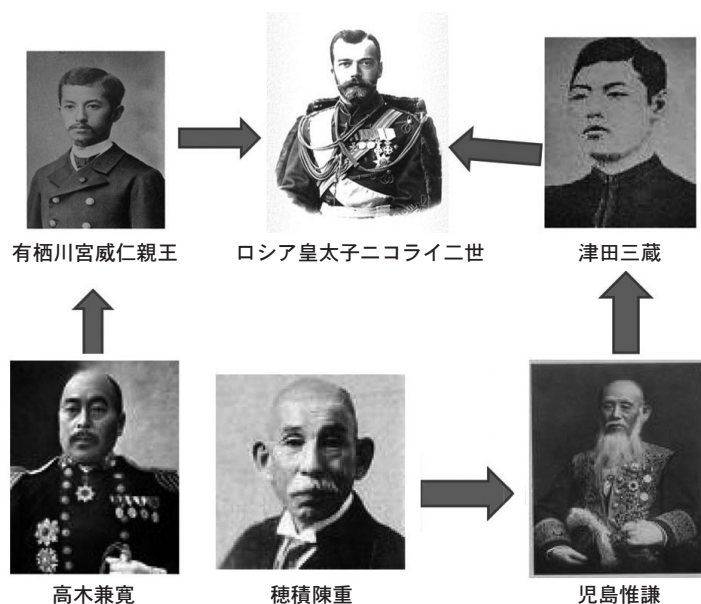


写真9. 大津事件（ロシア皇太子ニコライ二世傷害事件）
児島惟謙

国立国会図書館 近代日本の肖像より転載

http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/267_2.html[accessed 2009-10-27]

木は皇太子が帰国した5月22日まで京都に留まっていた。

この裁判をめぐる判決を下したのが、穂積陳重と同郷、宇和島出身の児島惟謙である。この時、大日本帝国憲法が施行直後の出来事であった。彼はこの判定に際して、法学者、穂積陳重に意見を求めたという。「外国でも敗戦国でない限り、自国の法律を曲げた例はない」「政府と対決して自分の主張が勝つ」と言って激励したという。児島惟謙は三権分立の信念を貫き、旧刑法に皇室罪の適応（死刑）は、我が国憲法を破壊して「裁判史上の汚点となる」と考えた「法によって裁く」との信念で、「法の尊厳と裁判の独立を堅持することが国家の自主性を確保する道である」とし、皇室罪の適応を避け、謀殺未遂罪により無期懲役と判決した。この判決はロシアの対日感情に悪影響が憂慮されたが、結果的には日本の司法権、近代国家としての評価を高め、不平等条約改正に大きく前進することになった。大津事件によりニコライ二世をめぐる「児島惟謙-穂積陳重」と「有栖川威仁親王-高木兼寛」が歴史的かつ運命的につながっていたことがわかる。

穂積陳重の「老生は銅像にて仰がるより、萬人

の渡る橋になりたし」の志には、高木の実学に基づく暖かく平等な医療、それはイギリス医学から学んだ想いと共鳴しあっているように思われる。またさらに、そのことは渋沢栄一の慈悲深い志とも相通じるものがある。

2. 渋沢栄一と徳川家達が慈恵会に参入した意義

穂積陳重の夫人が渋沢栄一の長女、歌子であった。穂積歌子は阪谷琴子（渋沢栄一の次女）とともに東京慈恵会医院の常任幹事であり、渋沢一家は高額寄付をしていた。慰子殿下は穂積、阪谷夫人に相談して、父親である渋沢栄一に、新組織である、社団法人「東京慈恵会」に加わってもらうことを頼んだ。そしてその草案を歌子の夫である穂積陳重に依頼したのである。

もうひとつのポイントは明治15年（1882）に創立した有志共立東京病院の組織は皇族と明治政府の要人の婦人によって構成されていたが、そこに欠けていた徳川宗家にも参入してもらうことであった。徳川16代当主の家達はすでに明治政府のなかで、貴族院議長を務めていた。

結局、明治40年（1907）7月19日、社団法人・

表1. 穂積陳重による東京慈恵会（草案）

総裁	有栖川威仁親王妃慰子
会長	公爵 徳川家達
副会長	男爵 渋沢栄一
顧問	侯爵井上馨, 男爵阪谷芳郎, 穂積陳重, 松方正義ら
理事	公爵徳川家達, 侯爵蜂須賀茂昭, 侯爵鍋島直大, 男爵渋沢栄一ら
評議員	公爵夫人伊藤梅子, 公爵夫人大山捨松, 侯爵夫人松方満佐子, 侯爵夫人井上武子, 男爵 夫人阪谷琴子, 穂積歌子, 男爵夫人渋沢かね子ら
商業医員	男爵石黒忠恵, 男爵岩佐純, 松山棟庵ら
医員	金杉英五郎, 高木嘉寛, 樋口繁次, 野村虎長ら

東京慈恵会が発足した（表1）。総裁は昭憲皇太后から有栖川威仁親王妃慰子殿下になった。会長、徳川家達、副会長に渋沢栄一、顧問に井上馨、松方正義、穂積陳重、阪谷芳郎ら、評議員には伊藤梅子、大山捨松、松方満佐子、井上武子、穂積歌子、阪谷琴子、渋沢かね子ら、医院長に高木兼寛、商業医員として石黒忠恵、岩佐純、松山棟庵ら、医員に金杉英五郎、野村虎長らであった。このメンバーからわかることは、幕末から明治維新における全ての立場の人を取り込んだ最強の組織であったのである。すなわち皇室-徳川-新政府-華族-商業-民間を結びつけたのである。まさに慈恵にとっての維新であった。

IV. 穂積陳重による新組織の意義

このなかで興味深いのは岩佐純である。彼は相良知安とともに明治政府が最初はイギリス医学を選択していたが、ドイツ医学採用に導いた立役者であった。その彼までこの組織に取り込んでいることである。さらには脚気論争では細菌説を唱えた陸軍軍医総監であった石黒忠恵の名前までであることである。まだ脚気論争は終結していない明治40年（1907）のことであった。

穂積は明治初期のイギリス医学とドイツ医学の対立、実学と学理の対立による脚気論争などを知っていたのかどうか、また知っていたとしても



写真10. 関東大震災によって壊滅した校舎
（大正12年（1923）9月1日）

どのように理解していたかわからない。しかし穂積の視線で考えてみると、大した問題ではなかったとも言える。医療が差別なく平等に受けられること、慈悲の心を持って、暖かい眼差しのもとに役に立つ医療活動を行うこと、そしてその実現のためにあらゆる立場の人たちの協力を得ることなどを考えると、むしろ陸軍も海軍も関係ない。高木にとって長い間のわだかまりがこの新組織によって一掃されたように思われる。

この大改革によって病院名も混乱するところであるが、東京慈恵医院から会を入れて、東京慈恵会医院となった。実際の運営は渋沢栄一で、寄付、利子、配当金は東京慈恵医院時代の約5倍に増加したのである。この大改革のおかげで慈恵は大正10年（1921）に大学に昇格し、施設拡充し目標であった皇室後援の施療病院として十分な医療活動ができるようになった。

かくして慈恵は強い地盤に根づいて大きな発展を期待されたのである。しかしその後にはまうちうけていたのは大正12年（1923）9月1日の関東大震災であった（写真10）。（続）

参考文献

- 1) 畑山けんじ. 鹿鳴館を創った男. 東京:河出書房新社;1998.
- 2) 吉村 昭. 白い航路（上下）. 東京:講談社;1994.
- 3) 松田 誠. 東京慈恵会と渋沢栄一. 慈恵医大誌 1999；114：521-34.
- 4) 中山和彦. ドイツ医学とイギリス医学の対立が生んだ森田療法. 慈恵医大誌 2007;122:279-94.
- 5) 尾辻義人. 薩摩の医学史. 鹿児島日英協会会報 2005;8:14-7.